

魂の故郷

(昭和十二年寮歌)

山崎善陽君 作歌
平城鷹雄君 作曲

一

魂の故郷に立つ
星清き榆の園よ
花芳る三春の夢
感激の涙あふれて
原始林蔭に盃かはす
青春き日の記念の宴
歌ふなり
自治と自由の高き誇を

二

六十一年の青史は薫り
郭公の啼声もはるかに
紺青の入相の空
魂は虚空に走せて
往昔の意気を慕ふ
尽きるなき川のせせらぎ
夢ふかし
残春あはきポプラ並木よ

三

いで湯湧く郷の宴は
夜もすがら感激はてなき
絢爛たる瞬間の夢
落葉松の林時雨れて
颼々の悲歌の調べは
榆鐘の響と闇にきえゆく
さびしらに
秋深みゆく静寂の都

四

颼々の暴風おさまり
際涯なき雪の荒野に
皎々と月光冴ゆる
櫓の音の玻窓にこほりて
限りなき瞑想をさそふ
悠久の時の流転
人の世の
悲しき運命ぞ明日の旅路は

五

曠野に高嘯ふ恵迪の健児
毅然たり若き生命よ
先人の崇き訓戒に
大いなる野心育む
慨世の憂はあれど
ここ暫し休息もとめて
いざ寮友よ
のこりの春を惜しまざらめや